誹諧手引種

乾

中村俊定文庫
文庫 18
743
1

誹諧手引種 上

一陽井素外著

尊經閣文庫

侯爵前田家藏書之記

侯爵前田家藏

誹諧乃道ハ淺きふ似て深く安きふ似て得難し
初心の時ハ淺きより深きに至て深ハ深きにふ
とも其淺ハ今ハ世俗の所行也多ハ邪道誹諧ハ只当座の興
為て根本なきハ花と成て実ふ無也
和歌の一体なれハ為ふ思ふ道ふ違ふ
然れとも今誹諧ハ世話を主て云風也ハ
所ふ為ふ歌書を学ふ也ハ

無学の人乃説法と毎とへハ堂と見る人の腰ハ一瓢と
持て行ハ一瓢乃ハ腰ハ一瓢と持て行ハ堂と見る人
いとゝ乃ち又新書物説法乃ハ説法と毎とへハ
京ときハ京と見るとゝ嘉祐と毎とへハ酉佳香と
毎て寒暑をなしハ同日乃説法
毎らひ会乃ら詩経三百篇も思無邪の一言ハ
世八品六万九千八百四字も妙法の三字ハ
説法の連歌も宗祇法師の注せるやうハ
教ゝ乃ちハ毎とへハ一句乃ハ宗匠きやうハ

いひ口ちきゝ作ハ毎とへハ悪く法書と学ひ作ハ
ハ世ハ仏ハ遠ハ乃ハ世ハ仏ハ作ハ乃ハ文を
学ハ乃ハ志ハ一句の風情句作を附ハ
切語孫鹿の先ハ乃ハ作ハ又云説法も人法
仏を世ハ毎とへハ悪ハ乃ハ
てハ世ハ作ハ句作ハ作ハ又ハ
胡乃ハ別ハ竹別ハ事のハ
ハ作者の仏乃ハ郭ハ
唯の新ハ人ハ

おもしろき所をぬきいでゝ誹諧の會にいひいでゝは笑ふもの
前句に附ても薬とし我も附句らしきを家には無道
きことなりて俳句をもてあそび隠居を用ゐてまた移
やくも是小耕ある人も一句のきゝ得ても俳諧ましくしてせし
ひとへに所をはなれて紀事をもおもしろくなれはよく平
生を慰しうるへき業なれは寿花香に似たりといふ
詩の句のごとくよきことにも深きはよきことにかはらざるなれは公
家にもむかしより風流はおもてむきの文を専
四海太平にして万民安楽の時上仁政を行ふ世

あひに忠孝を專とし家業も武道上中下にあてたるや
はらくは連歌はけしからず初心の人は
かろし誹諧は俗語なれは先いひよからん故に田夫野人
花鳥風月にも心をよせ一文不知の人もそのゆふ人の
する道を知りて風雅のやさしき心をもしるまじきは上古の
風俗をも知りてまた今の世は四季折々のことく民を
もてなしつゝこれ年の始めより万民に物あたへ
親ひ弟をも孝父子兄弟に道して朋友を嫁はるをもれ
くいに去るから他女の意の事業にも乃の如くへき事に派遣し

若文殿八季吟果世流矩の書をるゆと徴アて発端とを
凡和歌連歌の道ハ人人邦俗ハ殊なの附句ヒヒ有ハ
色部ハ八しく様乃発句ヒヒ走と称ヒ出ん家ハ初学
発句ヒヒと学ふ人門種の大ヒをいせ人門ハて発句を
案ヒるふハ古人の句又ハ今世の句ヒヒ我合歌のはヒて
よ作ヒて思ふ句ヒヒ形ハ似ヒ作ヒる事ヒ
なけれハ何業ヒても拙ヒ作ヒて八元身ヒ紀のなしハさも
有へきヒ事ヒ作ヒ事を見ヒヒ時ハ恥ヒ心も無ヒ
作ヒて形ヒヒヒられて、ハ味ヒある事ヒいまヒ

口附ヒる人ハ形ハ貴ハ何ハしも我ハヒ歌句を
ヒて句ヒ世上志ヒ事の師を教ヒて案ヒ文へきハ
さハヒ流風有て流方一ならハ中ハ上世実ヒいヒる
事ヒ者ヒ又上ヒふ虚ヒ法ヒの者ヒ世ヒ見史
理ハきヒ事ヒ世ヒ初学の人虚ヒ心ヒふ事ヒ
世ヒ事ヒいヒ出ヒ句ヒ作ヒ虚実ヒ文ヒ質
ヒ人ハ学ヒ実ヒ実ハ句ヒ花ハ作ヒ道ヒ先人ヒ
冒一ヒ也

発句の案じ方

春静かふる雨暖かふる日はてハ梅さきぬ柳萌ぬ

おもひ蒼ふくらふ柳ぬる作といとむしと仏身ハ是蘇国

句意也五七五しなりとハ　雨降て梅も立ら

ぬしと氣色ハかくてハ春の風なるまハ作意なく成ぬ

無を箇即ふしてむしさるう池庭丁を活し時趣とて

料理即春の仕ふる時ハ

夜ふかく春雨や花ひらく人乃寺　貞室

ひらく春雨と有仏無しさ屋と見んと思ふ人乃

嗜侍をとらめいてたゆく咲せて見ん世乃ちんと思ふ

蒼をかくらせふ又はし越を連歌

蛍さけやいたゆ雨乃出る　貞室

連歌とハ　一作なくてハいつまても同ふ形らさる也

雨の人の仏を知と又雨ふ仏さけとハ　あさとちの

詞をもつて上ふ下ふ共をきくもいふ見ハう共と

いふものふ雖次夜雨と云仏て共作ふ連さる

又秋乃けめ門口の縄簾の共よく動くと見て

蝦風や動きけめる縄簾見てハ又共通乃句

上るの白髭を　嵐雪

行く風の力絶動き出る縄をくるまし

初林の春ふ初てきしし新しく涼しと出せるハもと

しく冷事を保せる姫ハ初霜を次第ふ法き

風のふけハ我の風の吹くむと義さしのうんめをかしと

一宮の小竹せるを見ふ赤濃誓度

作之我と又年毎義小春ふ雪の胡蝶ハ特を

ものを知向花白髭世界五七言をたふ行らをを

越向　くらひをの何伝ふ世ゆて義小春

扉　初月ふらうふ死をを籠や圍ふ何　望一

〃　ハ小ふ雪ふハ白ふ白しかを桂を

〃　少ふハ白ふむめや自分乃元あを世　樵翁

〃　よををを婦もむをめも四特ふ

〃　早乙女やよこををを白のハ唄をこの空　素山

〃　ダンをやソろくを乃ものをてうけを

〃　伊やををや急をふ形くを乃をを春　乙由

〃　まをををて初をを明をる月ふ小

〃　皆人の立る春乃半ふ初や姫の月　貞徳

題向

名りや雲も絶く行通ふ

自作　雲折く人を休むる月見哉　桃首

日　神垣や程遠雪の山路哉　徳元

日　日本乃人恵おろしや冬　才麿

是雪名人上手の句也一句ハ一作ハ一句ハ流儀の
手ぶりなるべき歟也能ハ見つけて学ひ給へし

発句ハ神祇ハ恋ハ無ハ雪ハ月ハ花ハ　定家卿　実為卿　主殿頭

本歌取　製ハ詞　定家卿　実為卿　主殿頭

和歌連歌とも八百万神ハ十神之十神又八十神ハ神数ハ八百万ハ我
名月ハ数ハ理ハ神ハ八十神ハ八百万ハ我
世界ハ諸書ハ出ハ神ハ紀ハ奥ハ我ハ物ハ人ハ自作ハ自由ハ
ハ神ハ載ハ我ハ信ハ物ハ人ハ自作ハ自由ハ
何神ハ人ハ思ハ物ハ悲ハ時ハ折ハ

ゑらみ句作ありて其上是ハ何様に何となくとも思ひも
功者に至りてハはからす何様の句異なることも有
縦ひ前も有まし然し又親句踈句とも云事ある故の
如く神ハ自然に浮ふとハいへとも句作ハ親踈の
二ツを分ち候句の習ひの事なりと是ハ定家卿
始め事に心敬僧都のさゝめことに親句ハ親句踈句
とて二ツ侍りし踈句躰は力に秀歌多しとや
定家卿も申されし此比ハ親句の歌連歌のみにて
踈句躰歌稀に侍る事さらんかの親句躰親句乃

踈句躰の踈句さへ深く有難し踈句の歌
時雨のふる池の汀乃松か枝に露の色迄ぞ見えける　定家
山寂如き岩屋の戸に待ち居て目を見る杜鵑　慈鎮
此まゝらの類ひ乃歌なりて心我ならぬ次の外の親句の
引歌ゆゑ見えむ親句ハ更に法ならぬ外の作
有様々埋もれも右の事ハ云まさまさハ耳ち
うきをもてなしつる葉ハかりも踈句の体を
目録の内仙境ならむやさまさり但埋木ハ
此歌を手法にて歌連歌のつくなる位をんかいも

延喜年中こゝハ歌句くゝるものやうに成て詠句ハ稀〳〵
なれど代事異なれば今著句拙又根源集の序も
速急あまりと宮ゐもとゝ但舎の親句ハ歌句多有
歌句　ながを　はく　おもひの〳〵と　赤染　宗鑑
詠句　えりや　祇代の事も　おもひ　寺武
新句ハ耳をく　句のこゝやあるを　句しなれ
詠句ハ長ハ　詞を　俳ら　内ハ　俳諧を　おせ　句
を長ハ　昔し　なれ　詠句　ながを　歌
知き人　まれ　く　新句と　ハ　古風　と　ハ　歌

句こゝなれ句　ハ　ハ　美やう　なれ　と　絶く　新詠ハ　ハの
如く　歌連る　ハ　ある　まし　我　ハ　入ぬ　句　ハ　ハ　ハ
句　て　雅　俳　俳句　ハ　ハ　初　ハ　ハ　ハ　ハ
ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

松ハ　蛙　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
句　ハ　初　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

我が元き謡を好て風さるゝを非とや中ゝ緑樹新
流んて八色々ゝの物ゝとあるを云て化せ一向に蛸と
いふものゝおりしを諸説あるゆへ人皆ゝ形蓋を仮
る見孤仙世俗を除之を乗り力知き説諸を見事
うゝ幸なれ小古思てるるも理へとゝ申せ大小感伏
して更ゝ月の陸地を改め概行せ一なんゝ又云
欲小奉旅取者如く連流ゝも小あるを行新古事
本伝の図を云て古ゝつを見ゝ申ゝる也

列卒のものゝ多くき宵也中ゝ申ゝ也　守武

我背子ゝ多へき雪しさゝ小のこものゝ多ゝ申ゝ也ゝ考も元連歌
一つまや梅あるきゝる雪小かくまし山と　宗鑑
梅会ゝまゝる家久哭のあまきるゝとなゝゝふまゝ八人九
鮎　勝あるゝ者き蓼酢この方　徳元
荀子　青出於藍而青於藍
もゝ上て生ゝこの生るの多ゝ紫小　蒼狐
黒小あゝ八負小申る俗を多ゝ桃源小あゝ八桃の紫ゝ盗有る皇子
一物をなゝしゝ申きゝて伊紀佛　風虎
未来世ゝ一物

此類ハ俳初学の人心得なく其附ハ詩歌にも外しきと
思ひなふあて又ふ我身の為しけれ云其句と思ひ
このうちなども少くと心得るとハ先ツ加様の事なき
せ為もよろしき本歌云の外気載にあならさる事
先ふ着き類句無に侍し又歌ふ制の去らぬ見ゆ
まくへき詞至ある詞なきといふ事有制しと云ハおかしくと
月やあらぬ 桜ちるをの名歌の五文字を又上に置き
禁制せらるゝ也 遠慮もなくきしつるハ短歌ハ一ツ紀
世ほ世ハ憂世歌や古きハ徐園のから紀世の小柳ハ玉乃

俳諧や家ふかよふをきらひ又重ねもちしふきや明星
喜ぬめかてし附句ハなかめしとハ殊ふ宜く慰しきます
詞ハ路らしき詞続きをよくかきれ也四十餘首有
是ふ禁ふせら深く入ねる多なる歌ふ見も
白き多き制の詞乃事ハ昔より俳諧ハ此法也是ハ
文字数も違ひ其よむ所の趣も大きにかはれハ猶
通し古人乃句ふ
月やあらぬ我身ひとつハ新法師　貞徳
なかくと鳥うらむや窓乃中　野坡

さてもこの所作は生五日ハ[illegible]なし　真角

[illegible]なるハ用捨の[illegible]事をよく

[illegible]と通俗志ハ[illegible]乃来ハもかを[illegible]ハ

この夜年賀[illegible]ハ[illegible]ハ悔む

へきの常の発句ハよく[illegible]ハ[illegible]

頃日の俳士[illegible]ハ火貨[illegible]と知得殺伐[illegible]事を

好む近世又現在乃人名[illegible]も憚なく自とし得[illegible]

[illegible]る判者[illegible]の制禁ハ非[illegible]

[illegible]の法[illegible]過ぎく悔むへき事[illegible]又

土

ぬ[illegible]ある[illegible]をいひ[illegible]

[illegible]法果ハ[illegible]ハ[illegible]　吉水

[illegible]相の[illegible]を[illegible]る事可那　其角

明日や[illegible]ら定め[illegible]やアラら　仝

[illegible]のとくはけ[illegible]人の[illegible]又[illegible]

白炭や[illegible]の[illegible]しの雪乃[illegible]　忠知

[illegible]の[illegible]又右の[illegible]の

言水と[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]と

[illegible]歌の[illegible]ハ[illegible]

熟字平仮名交ぜの詞歌徘諧ハ何れも
いとまれなる俗語平語ともよく入てきもむかしハ
詞も句も新しく珍しく他の糟粕ならぬやうに心遣
きわとなく新を好まれ吳ともくもるまじきハ唯
唯一条ハ類句無ものもむかしの歌人も
麻ともむきしてもも類句のこやうに詞の扱ひかたも
濱のさ能ふること新しく面白く作るこ
業也と心得て執行きく

平生心意在きまま　七食の袋

歌連とも学仏無へきるハ先哲法書ふまるし
亟ものしることけて流儀を今四民ものなるまま
いつまても其の勤め其業乃傳力よりひ事なれハ
お傾きく工夫もへきいとまなく仏無人
と思ふ〜むしより上手のせ舞句此内他もほめ
自らも解してよくと思ふを粗く無儀しく
我発句のなく学ふ学ふ唐まれハ自然と
其意味の深き所も自得ふるまふ到て

業をする白も格別よく学問する人歌の教ある
かもあり事も意しなるらけあるを志ばせるとく
古人うの白の形も仏を意ハ何し家ふらふハ白鳥を
よくせむうるも又連歌ふ「四十四ケ條」として多く仏法よ
物事と物ふなれらく書きあされ中ふ「会の
袋」とらふ事者と食ハ袋を二つとハ持ハ何もかを
一つ袋よ賜え歪おとく又事を仏の袋ふ徒め
多もちて白作をする時意心撰とけと有べ
と也人のもとく招のまて尚歩又揺顔多ある事

上

有ても万ふ目を付仏ふけ歪大よ益ある事

古今不易と流行と云事

詩歌連ふ其代の風俗あるのあく流ふも時と変
化有て白体多く也事ふ随ハされハ流行ふ有事
ふりと云ハ風流のこふ遊び繁容意類妙義
等ハ也さるといふ事も今も上と方ハ勿論
下くしも仏ある事ふく風俗又音楽能謡其外
平記義ふ於てハ文ふ変る事ふ風流も不易

の系ハ古今集に撰ばれたる歌ども
なりと晋子雅俗集よりやゝ俗俗乃風おこ系
たるなれども古人ハ功をかさねれ行事も一向ハ
いひ出らるゝ事なし秘密なるもの也と古来伝
ふ元てゝ元ゝ元人ハなくて只自他をあやうり
いきうとまねまね見と給らはきゝて
なる物を見ぬ同じ事をいふといふ古風乃
共ッ共中ハ生まれ今ハ六十あまり俗ハ人の
当風ハ中けまゝ今風ハ之ハ差次と早下

古

世ら下ゝて知ゝ世風といふる時の歌章 長谷堂
重頼 俳諧 立圃宗因 流号 松翁 一向とても仇なく
白ハし時代前後の堅地ハて左和義せら下
又昔ゝてもハ地蔵相ハ念の入さるハ元やもく彼
まゝやもし今何の用よ之次当時の作者代を
得て随分念を入く白業せよ今の業のなも至
宝也又鬼貫独言ハも古風といふも当風と云も
ハも小代と求めるる白のもゝふとアて弱古の
名ハあまと諸法道を行ん人の白ハ業とせ

俳諧の別はあらはしがたし
人の端なるをもかけしけるとかきて安永丙申
歳平もつ人初学のためにかの古今白雄と題せ
集を印行せしかの世書世に行はるるはしはせ
申椒堂拾遺のうちに事をもとして天明丙午集
再び編しかの是をもとにして不易をむねとせ
撰しかの白雄の序にも速に学ぶべき不易の至とさへ
執しかの時に於ては特にこの法にはかの俳諧
又云白雄にても初学のうちは解しがたき句解

十五

なるもあるべし句をさるもあるべし
雪の景のみも学ぶべきにあらず
搜しもとめ事にあるべしの一つ
雪撥雪超沙千巻夷文云杜鵑松魚指年春
暑納涼清夕寒秋初秋七夕角力月
菊紅葉紅葉黄秋時雨小夷義塚霜雪水鳥
宝さ茶書等まちまちの一つ題に五句七十句
ばかりの数多く集して師と教む人の法則を受
師いかにとかくもていくたく人に事をする事

[illegible]

神祇　釈教

神釈法楽八丈德[illegible]又行[illegible]事の吉[illegible]と[illegible]
又[illegible]の[illegible]と[illegible]
紀事小[illegible]
[illegible]

[illegible]
得あ[illegible]但石小云地名[illegible]

神祇

北野天満宮

連考

松の[illegible]とすもゝ[illegible]　紙舟

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]刊を寺西の手[illegible]

上ノ相通　西宮恵比須

[illegible]ノ柏庭の[illegible]　才麿

[illegible]にしいき横の相通し[illegible]柏ハ神の[illegible]

[illegible]一葉[illegible]

下ノ相通　[illegible]　市丞　[illegible]　桃青

[illegible]ハ皆押合[illegible]

[illegible]

[illegible]ハ伊勢の西宮[illegible]

[illegible]

事[illegible]群集[illegible]

又古人ハ連句相通[illegible]の[illegible]ハ時の宜しきハ[illegible]

[illegible]

三輪

[illegible]杉[illegible]　社[illegible]　素堂

[illegible]ハ杉の[illegible]社[illegible]伊勢造宮もあり

[illegible]鳥群集[illegible]

住吉

若みどり神のちぎり松がねられと　来山
岸の姫松いく代経てあねられと年くおぼつかなし
ミしらぬ何も謀に神遠しとの意也

釈教

報恩講

平等にふるゝ世界梅やお霜月　梅翁
中納言家持の歌にもよりて弥陀の誓願をよめり
西本願寺にて
西風や何を自力の行ならまし　仝

那哉自力の扇つまみては他力本願乃すゞしき
事は至つてうとしと也但西風にて秋をおもはせ何を紀
行の意をよめり

さくら咲哉よくぞ弥陀乃彼岸まで　支考
二月彼岸の頃彼岸桜に偏の細きをかけてよめり
高野山蛇柳
秋月みても柳とみえてきびしさよ　乙由
言伝に仏の若恵に寄て柳と見えし大蛇となると
ミゆる也と

十夜会式辞をめくりて

果しなき弥陀の誓ひ乃うちふ義経函　蓮之

八宗ともろもろの仏よゆく春の一節　同

形稽古の相通ずる連歌ふよむ事也若想ハ乱らく不

習ひ所の事を多ハ師ふ書て学ぶ

離別　送別　留別

送別乃句ハ首途の名残をたゝこと毎旅行者かく

仕そうらん事をもぬ[illegible]を俳三昧を他国ふう

[illegible]止まり又ハ古郷ふ帰るも[illegible]ぞ題いろ〳〵れ

らん名いつまき実意をさらふめてゝ〳〵集次へ

同国の人うらんとあるを

立別まいなせ恋ゆきや峯乃雲　貞徳

いなそとある歌とりなせしと毛の俳ろ[illegible]ろ不

実性詞ふ保し

梅翁を送る

まけらゆ〳〵ものなら片目なの江戸　梅翁

梅の一字をきせつ人なれハ目も所〳〵ろけて

やうやうゆきて見ばやと也

路通うちのゆよゆくを送る

草枕まことに花ぞ夢なれ　挑青

都のゆ人ハ夢をせるなれハ旅屋の俤きぶ

ぞ夢乃ぞ夢なれ　草枕ハ旅乃枕詞

うちの夢へ旅ゆく人へ

山川ゆ云ひせのふ　支考

紅葉のよめる河をうつして旅中の秋風をいとく

とも

我子乙別の東武へゆくふ

ゆくとしさくらゆく旅や富士の雪　智月

三国一の名山を序形ならるハ旅の華ひ[illegible]

又留別ハ留をを軽くを[illegible]ハ家門母を事なるをを

男ゆ[illegible]他の人なるハ遠留中の心配ゆを謝をを[illegible]

曲言ふ為く招きけれをを[illegible]ゆ

ゆ[illegible]猶やなれをとりて[illegible]乃ゆ　梅菊

別ゆ[illegible]ハさあやをとけをハ序と[illegible]ゆを[illegible]

めるを

匡留日あら沢こんぬ

いぬくと鳴らくハ吉らしつの秋　吉考

あるゝハ若狭をもむよつ田ハ稲くとゝ乳食し

しも也

加賀の国関谷とゝ詠みて

関谷の橋ふ吉みくゝとこのまか那　仝

見ふ吉ゝまを見るの情を述てゝ

ゆきて又来むまを繋ゝて

主帰る日吉ゝもあゝと三論の杉　乙由

松ハ吉るも知るとゝらしの強物ふ吉てゝ

俄ふ江戸ゝ帰るゝの出事けきハ

雪まゝくハきあゝ面白し　この旅　衣　柳船

旅の秋惜ふ歩てゝ立つを惜む乳衣ハ旅ふ吉てゝ

羇旅

羇旅ハ旅中の事くゝ歌ふハ長途の旅とよむとゝもゝ

字ゝ吉ふ左ゝ彩きゝも乳ゝくゝてゝ作れハ俳諧ふハ歩行せて

旅中のゝゝとゝ心得てくるゝ一ゝ吉ゝまゝきゝ乳

作者明石帥老の景ふなるめり　一説
家ふからハせらくしき所を藤原まハ為人
宮の御宴ふ似るを藤原の郡　桃育
忠度ハ舟宴ハ付ハ彩くあるを
宮ゝ[illegible]ゝ事を少ゝやくまれり　女角
御もゝ[illegible]ハ方角も遠ひ思ひうけさる方ゝを
月しらもてあやまるゝ事ふ[illegible]
あり

元日も旅人を見ふ　驛ゝの郡　古德

不川又大津ふ在ゝ[illegible]れ、元日も[illegible]
京入あるを目別ぬ人ハいゝ[illegible]ゝ
瞬　物ゝ片ゝ　藤原可雄　蒼狐
旅宿のゝ[illegible]
初夏ふ[illegible]
[illegible]

名所

名所の歌ふハ文ゝ讀合せの京物有て事ゝ[illegible]

よまれぬ俳諧ハ名の字義ハもとより好ふ書し附ふ句さ
又そ仰らるゝ事なくよろこ合せ来る遍し也上世ふ名そらく
先人の発句ある所もなき名所ふあらさる者もよむ
よむ事ハ若しらられぬ本名所と私の名所とハ差を
まびらか私の僻言へき事抱名所の名所目当の題ふ
て歌連歌を集めらるゝ中へ岸傍なく私の名所の句
案しての名所きらむハ無念の事あるへし但尼ニ知ヱハ皆
古名依て

ありまハくしよはつ之花にかり　ありま山　貞室

ともろも当地寺移るきそ何とよむへきやと
尋く諸ふむのよし此山そと答せしも

むさし野や富士の霞乃古けふ　其角

富士おろしに誘ひ降来る一ゆらきのいさ佛き
此おろけ原むさし野のみにハあるましくて

月しろやむさし小近き須大の浦　鬼貫

月の須大乃寂しさ心ふ思ひ月ふもろみけ
随し詠歌ふも身まむらひて述懐ハ旧の作をし

忘くるましふかくまみちのや渋屋の橋　桃青

森雨の大湖雲霧霧兵勝くくる中小一節
横ふかの長路の跡を今宮ふるこの如し

胡蝶申や指ふたさ海るこの山　青山
世るの細たかきこけのそふむしハ森ふ
くこ指ふたさ海るの作云いとおしく

舊跡

但ハ所ふ住けて不得ある事又昔名ある人住
住しを井池弗本瓦石ものふ殘ている事

鎌倉ものて
七百余年八百の昔ものいとふめり川　梅翁
世ふ名るまて低たを高ふ成ることナ殘を
後國土の貴ふれと言ふ名ふ月を与へ拾ひ
しを

伊賀國花垣庄

一下里八皆花ものるる孫ふ　桃青
上東門院南部東宮半ふの樹を植へ
ふし樹と作けるを愛住時ものさえぬ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

羽衣の松

松ふれゆくあまの川　漁師所　屑菴

世和之稚の和の歌小者論もなく幸ふ[illegible]

[illegible]つけていい侍ふ[illegible]て羽衣の[illegible]

籠の梅

[illegible]　大[illegible]　源俊[illegible]

[illegible]別当田の社前小[illegible]　[illegible]二度のかけ[illegible]

[illegible]八[illegible]中小[illegible]

[illegible]

大物の浦　[illegible]

[illegible]この馬もかつての世[illegible]　[illegible]

日尼寿小義經[illegible]の浦[illegible]

の俳[illegible]文[illegible]

[illegible]

憶

意ハよむ所の題いろく有て一つまの部出るも意と詠の
数多く今よむ所も其題をされと俗ハ意と歌と
得てよむ事稀なるまハ作例もめ[illegible]
細類を得る事ハ功者ハよく仕て其人き也
要ハ[illegible]ハ必あめくと[illegible]
さも作らしとなけく人ハかたらて
うち解ぬ事や泉谷の底より後　貞室
其意ハおもしろ句の表あて明らか也

雅意

うき人を又ハ伝ハ見むはのきの月　太祇
夕くるまの物うきふ憂人の事ときまうて
又も見伝ハとも夢や
待意や蝿の陸子を半くふも　鷺水
人治ハるハ世よりの事も為と物とも
ありし
業のさや樊ゝ　作夜の数やてふ　芳樹
思ひて作ハ小ハ世ともに俗ならて業のさや

[illegible]

[illegible]

[illegible]

哀傷　輓歌　追悼　追善

哀傷はかなしみをやふらんと云輓歌はまゐらせ[illegible]

[illegible]

詩を賦してとむらひ追悼はなき法ゆゑ悼むこころを

追善又追善追悼は法事供養をなして佛菩薩

[illegible]

[illegible]

輓歌　追悼

[illegible]

出もかなしさぬしとは至て篤実なる人と[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]や世ハ逆さ海の言乃葉　拙者

お書ふて白玉ひらう也

西行師を挽して

なるゝやこの櫟と折まこと秋の風　太宰

秋ハ今こ氣まて風まを刺ちよりい悲風と云

悲ハかなしみ[illegible]ハ櫟の必く用

主ぬ[illegible]ゝ[illegible]折ふして別まくいくゝ

かなしむこの意

秋くゝ小ゝれ人へ

[illegible]ゝ同まゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ　方山

[illegible]子の好こしもの[illegible]る毎小親ふ[illegible]

[illegible]用ゝ[illegible]小さゝ[illegible]を[illegible]て用うゝめ

六盤仙者[illegible]

[illegible]かゝき相る[illegible]の[illegible]ま[illegible]　貞徒

[illegible]小道を[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ハ[illegible]

進善　悲福

粉[illegible]ゝ[illegible]ハ粉[illegible]の[illegible]　貞室

[illegible]ハ[illegible]師貞徳の[illegible]

法蓮の話を述べる

母の法華会

葉ごとに花のごとくなるふのかれ佛の花　古文堂

もゝもの葉と取ひとあるも仏の庭八人に

七種の色

無分別なる佛の中法やとけ外　暦月

極楽浄土ハ話くゝ夫とつまかたとら宿まき

事形ら云ふけ色ふ死ぬ仏道の中へ

世ふ立ふくしく

百里の墓ふ参りて

まちしいを志ふし要乃かのさ扇　真侘

間世と云て八今ハ佛ましうは座しされと花

男ふ要の形き扇乃ゆく仏ていも善人

して力なりも俱仏ましいハ法の字ふ花と

ゆ行ふ扇と考せより

桃栗や佛となるとしー三年ニ　若狐

桃栗ニ年柿八年ちりへる後ふ考てふ世の

実法生りしを成仏の栄えてよもあり

懐舊

懐舊懐古ハ他乃上又我身のうへ乃ことしまを記
〜或ハ歎きもうるゝ又長傷ゆもうらゝめる

夏刈高鉢ゆて

夏くさゝや兵ものゝ夢乃ゆめの跡　松青

秀衡在世ハ結構をなせし後ハ荒廃に成
有て今ハ只春の草ふかき丘ゝとなるさまハ誠ゝ
哀の極ともいつくしし

西崖十七回忌

ゝちの花も散て我秋の古懐哉　鬼貫

崖ハ一さゝひ日頃ふかき友懐紙ふゝ名
多くあるを見て我名も彩ずして古人の好
ゆゝしゝ

よし野山ゝて

餘の花あるとゝも　横死して太田ゆう記　長堂

よし野ハ今ハ人の山ゝとなる長傷ふかゆ　ハ
正成戦死なり戸行のゆくゆゝて太平記ゝ
力なりゝ

[illegible]代菴の古きをとゝめて
[illegible]ハ名のごとくふるしたる事ハ夾紵の
[illegible]ふるしと[illegible]

甲州古府中にて

今見るまゝハ唯幕のうちもぬれ落　凉帝

信玄在世ハ堅固なる唯幕のうちかゝめらさ[illegible]
錦の地も終ハ極乃形石墻乃殘る杯哀かし
こゝ[illegible]

述懷

述懷ハ都て仏ハ[illegible]
[illegible]の年経ましも[illegible]
[illegible]と恨ゝ又ハ己ら者を[illegible]
たゝんあもしやゆ[illegible]のさねもしらしは　梅翁

京[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

文月や六日の月の八ほしき姫乃子　其角

盆踊乃りてはけを乃て居なるき孤獨を悔る

元

病後

何ごとやら古稀も幾ふ老法秋　支考

病ごとなりまさる指もけりられぬき髪の乃ん

ふる杯んもむさくしるく

七日當麻寺ふ詣曼陀羅を拜して

ゆるもをへうりて滅法羅ごの　古周

紡績ハ女の業なるを都會ふ行てハ使ふ人

なもなきふ成まりんとらふ姫の母成を幾して羅

恐ろしと

暦日獨吟して

虫くくとふ糸紡や氣のむきほ書　才麿

思い風しるる事ニのまハ聲くして物ふん

ふくと共んの結びまを見元の糸紡法

糸よ書てよめる

贈答

贈答ハ他へよみかけし歌又ハ句を答る歌をよみて返す乃部に多くきこゆれ尤常の俳諧にも日頃なから発句ハ何事も脇を次なる答ふる人ハ　倚斎一時軒惟中此地に居せし初会に

めしうらしとて老梅を蔵せし難波の庭　梅翁

浪梅花浮に流るゝ鴨乃泉　惟中

堅紗の比しよりて俳諧の発句を集めに出せしも擂れ又人を答けもするを答けせらるゝ向たまわれ

否に同し其客に行てハ座敷の庭の様子或ハ料理向乃珍物なる時の宜しきなに随ひ賞し謝をこゝろをあらはすへし

扇ヶ谷（ヤツ）たに京登りて　法会の仏師によみて

谷しくや此恵みおふにもちゆ一句の花　梅翁

鎌倉にハ扇ヶ谷梅ヶ谷なと多くありて数有名あの恵みおよほせし風を我ものとして答せしを示しとれ

撰ひて

久しふりにまみえて旧友に詠いて

笠ぬくや出合かしらの雪乃炭　梅翁

笠ぬぐ山と秋葉あり所の雪　繁の事ホハ鞍ホ

きたるもの笠の雪ホ降らものを拂せしく

英法の雪ぬぐ川の水樓まて

ホのいろと見ホ見るものハ皆ホ　桃青

樓乃賞ホハ句の面であさらえりのハの八乃一字ホ

一句の力有熟考ホ又ハ樓を十八樓と云

記あり

彈院へ招ぬまて

曲

新蕎麦や物をもいはぬ二物　寺島

其風味の宜しきホ何のまも品ホ食ホる

彈語ホ本来無一物

悲き方へ十ホ世俗を少ホ忘れ時

雪と墨形ホらも人令〳〵の郷　樓川

ホホホ墨ホの遠ひハ敬ホる餘ホ居ホ已も

令下の事ホ六ホ拾ホ自通も住ホホ祝ホ歌ホ

又答ホ所あるホの句ハ答乃撲投ホ答ホるホれ物を

優るおりホホけて早下ホる句ホ附る仏投ホ俳ホ

給者も先是を小等しく癒まん早ゆし云けるまん
癒る也又意拙ゑて給て久しきふハやもふ云しき
公又反して嘲む心をよろこふる有難仰事の挨拶の
意對ふかなる事歟と公得てよしへきこと

信章ハ石より登ると来ふふ

いやりをし富士を見ふと見ふ云えの宝　季吟

日松ハ都の不死しとヤ世ハ鏡のふじを見ふ人ハ
見せうしと船らふ云こと

他國人ふ我ふ法花の菴を訪ふこと

たうとうとけうと吉野を尋ふ浦ハ多　梅盛
栄も紅葉もふるとなりの秋萩乃ゆ歌を云こと
早下の挨拶こ

答ふ解し

居見ふるや我ふ入ふ井と芝乃桶　嵐雪

山ふる落かれハ登けなと物ふし世めて已の
ふの花ふきをいふふ桶の芝庚云ふ一ふう
せんこと

宗因宗匠歌也ふとやもふ来ふうの歌

歌の父花乃兄弟よたのみは人　濱松 清長
古きも今の序乃詞と梅の美きをうたひし難波
津の梅翁ハ師なれハ父とし我也ハ弟子なれハ兄弟
無くしえ

絵をやめてせんかたもなき數ならぬ　浅々
緑の糸乃香ら歌を言ふとつゞき下ろめる亦句乃
面ふ只そえぬり

畫讃

画賛ハ都て其圖を賞美しておよむへき也詩歌ハ
て八画乃起を述て其絵と並かる為ふ題を添也
俳左なるも又ありて発句ハ五七五なるまたハつい
えうくし只画の上ふかき継せらるを添て之ふ書くし
未熟の人ハ絵の者乃俳を自ら世も者よみくハ
定ふ手柄ふしてくハ其席ふ需められてよむ事
あれハ古老の人さへも飾らぬなくてハ如何のこと
業也

平都婆小町

おくられし風物の姿ゆくら　梅翁
茶の色ふかくなりて花のなごりの果　季吟
はるの日ハ遅の迎をれ春の日ハなりあせし
まゝ小乃お歌小よりあり春日ゝ格個やさら小
匂ゑ立をゝる所各人の業とゝく修し体を
へ

洛の屋舞乃自修あやゝらんあなゝの方小
新ゝをむけゝる法師重さ　下略
ゆちゝをむけ我も宗教ゝき秋の蓑　桃青

秋々の越いゝあもゝ体し
女と達ノの形小重ゝ小

九年仁の苦思十年花ゆゝも　祇空
愛き川仆の勧め小ゝよゝき宗ゝ十ゝ年法
芳八九年面壁小日ゝ芳ゝるまゝきと花一句和
ゝて宗小

浮ゝ竹の重小
ゆの居ゝ　おゝゝゝい竹ゝ重も降れ　光士
王子獻竹ゝ重ゝて豈一日も住居ゝゝ

ゆんやしの河ふらう氏居を吳在しを一向の
仕ゑ和らぐふ歌しう

題詠

題詠ハ面發の題ゐて又吳なるを發ハ形あるを面を
廿屏性を述題詠ハ歌の組題も日拍たるらナ七
文字ゐて廿ハ作ゑたなくてハ詩とならぬ作を
爲の題乃如く悉くよゑ入てハ作ゑたるらん詞ハ
いゑやうまても題乃表を少くと云ふ面くやうふよ

殺生戒

番數をもとゑ殺さらせ我心　貞德
番ふくなると數ふさるるも我心を殺し
ちらへさ戒をたもてよくかく題の云乃
面く取ふ目を隨へし
惜花不拂地
我僕も落ゆゑよ掃除ゆるけど　廿角
地を拂ハさる花白の面ふ散らゑ毎作云
あゑと

去此不遠

蓮の実や為てもおなじ池の中　尺草

十万仏土といふる法の道もさてを去事まさらに

次〳〵てこそ世界一つ池の中の如しとなり

鶏洞話

おもしろや此川に浪ふきかけ　貞佐

世界多の遥の国を中にして世界と称

せしの御使者よく御きこう

三界唯一心

百とせや夢一節のさめぬらん　そばの花

是六式禅師より出ると雷めぶりのひて出来ぶ

ものは百生の形乃名となるも唯一心のなせ

る所やちうふよくいひけるなり

物名

古今ぶ出来始て出来る頭のもの名を六十一文

字の内へよく入る歌都て歌ふよくかくれ歌ハかく

よく作る事しるかくし題ともいふ也

昆布　搗　野老　摧

蓬莱乃山ハ春ゐきさゝこゝろの中　梅翁

槻　卯木　松　椿　桐　枇　梨

月夘りり待く趣ありし妹もなし　卜宅

螢　津　岸　瀨　濤　雫　帆　渺　笘　浪

雨はらさし蝉枝を身をかきといふ倚たつく　琴風

鶺　雀　鶯　鵯　鷄　鴛　鳶　鴫　雁

くりうらん時日ハそしゆく廉屋ろ也　菊峰

伊弉諾　伊弉冊

鶺鴒やいはなくとよらるいさゝなき　部波

祝

祝ハ泰平吉瑞昇進婚姻誕生髪置袴着被初帯解年賀新宅等也是等相通連歌を入てなすを専副して婚姻ニハ其事なく八詞の縁語をもてさとしさまさとはいふ乃而かも云しく君の千とせなりし八時乃事しきに随ふへきなれ

長臥九と皆まへらんの道を讓ると定て

接しめて今も我しめんほうく乃花の枝　貞室

ふまき子の面目（メイボク）ふ名をとりけてく

松山政也新宅

屋うちめや新樂（ハヤシ）ハまつ川出声　梅翁

子姫ふの秀白ふして新の字屋ふ極者

鹿ふ昊芝のかくる方ふて

草ふ昊芝ふ本ふちんてうやきけ代の夜（玲 重）　正長

草ふ有ふ昊芝ふ本ふ有播の幸ふ流ふよ和ふて

武家の相伝ふ

詮梅や古き穂乃末ふ世方一義　万子

詮梅ふて幸世ふ幸世ふ夢世穂の字又詮ふ緑者

曲菴七十の賀ふ

子代も紅ん（ムベ）松出青乃杉ふ等　布門

曲布ハ当月流の俳人也杉も菊も昊名ふ

菊ふ等ふ引し又菊ふ青ふ等ふも以ハ日し

昊名ふて詮ふ中なふ是ハ中ふ中ふ子代も紅ん

ふ引し又云菊ふ等ふ云昊名の物ふ中ふ

切字之事

切字ハ一句を差別する仮名也いろ〳〵の詞書に十八の切字としてあるを略し一しほ通俗志に出る

哉　もがな　ふぐり　計　ハ　たり　めり　ぞ　又也

何　茅　嵯　やかつん　香り　舌　拙言の方　集りきあ

早　点　てとてもあと　付方れハ　接続しても切字

乗し　ぬ　おまま　置　置じ　ぬ　置り　枝　向し　結ぶ　荘

らん　らめ　たま　いざ　いさ　いろ　いふ　いで

いづく　いづち　いつ　いつま　ぬど

下知の仮名　ら　け　せ　て　ね　へ　め　れ　な　よ　枝　ぬ

やトうトハ　ろ　く　ち　つ　も　皆切字也

切字のふなりさるから

不のぬ　ならぬ　さらぬ　ずに　事なぬ　但ハ　円　又　ぬのぬハ　又

ぜと　只　又　さと　の　あ　ハ　あり　又　又　ハ不のぬ　て

きりきりで　ん　え　く　え　ハ　早　如　点　切る　も　是　平上去

却の如得あるとも　ず　と　ず　ら　し　又　え　く　や　い　を

ハ治定点切ると仮得てよろしき

きりし　切字　名　ろ　云

てふてふの陣さくら 東西市代 等の類也 あるなる句
める ある ある句にも通ずるといへども
きれ字なしもなきさまといひてきれぬ也
右のてにをはを体として発句をなし切字なくては
発句にならねば二字切三字切ハ句の中に押え抱の
字を重じ其外に大廻しを廻し三段切といふ事
作意を綴て右のてにはなくて発句を仕立る事
終に附して八重つらね文字にても必切字を重じ
是故実也古人乃発句を口伝ふ皆此てには

あるハ自然になきハ名人乃上の妙也師説あまたハ略す

已上通俗志の文に愚言を添ふ

右二字切三字切の事二つにして切るにて切字ハ非也次
切字といふハ一つにならずハ返し三段切ハ五七五皆定の其
五て作縁もなきを切字といふを大廻しハ五七五の上より
下へまはるをいひ又下より上へまはるを云也是を廻し
乃名目ハ無しかならねど又古人発句となす
七文字の下にその仮名を重ねを返し止めて無下の
又文字を重ね又句切といふ事あるを是なるハ一句也

若狭を自得して上乃手まくに宿てふはの引句汁
まの雪の景よりも出とよりて富ふ景せり共印
本乃中ゆてハ方山う暗山集要しきたさを
学ぶとしてハ雨やまうち多ゆるくしんあらん
人ハ時の名師ふくろとそ、其実ふ同学のへき
事也

俳諧手引種 上巻終

手引種附録上

神祇

夜神楽の吉やもちろの日晴る　錦車
正直乃かゝ屋や神居松ふ雪　蛍水
冬若葉神の姿松伏くまと　涼山
生ふ先や燈を向一乃川屋しろ　霞外
雪と見ふ仕丁も暑祇園の舎　祇寛
数和るもろふ釜や渦まいま　仙翁

住吉

春之
社時雨
原外
親魚
素行
素外
可元
雅朝

菫廟
仝
仝
仝御忌

一、
早を地ふ苔根所や百まつと
きてしめ居 春のあさてしや川社
ちくや市後芽ゑ色ゑや異後神の梅
ちゑ風ゑゑハ梅ふ立ちうむ 神魚
神ゑ蘭や梅ゑ香ふ粉氣の毒ゑ
月ふ梅の威や十寸 読ん九百年
夜ハ一ゑけのゑゑ船ハ足ゑつ毒ゑの京
伊勢と神ゑ元音の河ハ参れ ゑも

南都
狐園會
仝

天ゑ無と神の志新の元 皐月風 汁実
芝能や月も暈ゑ山 分香
毒神や海ふき 國と神年ゑて 仙里
月神やまゑ日もまゑて元暑 岩槻 五計

釈教

月ふちゑよ毒師の胡蝶 三禮
蓮きてし寺ゑて安楽国 法夏 從一
棟ふきむ十夜の月や真ふ生 素外

稲妻や俳諧の金龍を経なりて　岩渡　扇朝
父母乃きとくいのちをゝ　嘉祐

送別

梅の香先に見知るし門出はし　龍辰
今や旅出の面影へ柳と　左外
梅ホ芳きやうてうちの出発　李門
別れ中ホ嬢きハ梅の香ときのく　素外

九月十四日朝

雪ホ首途をしむや酒もあるも　意外
月も名残を惜まるゝ旅衣　素外

羇旅

羇旅の乳をいとるる雲や青嵐　嘉秋
鶏ゆるゝて冥土ゆくやかゝ沢　其葉

七月朔日伊勢を戻りて

今朝打ち秋や一葉乃母の蔭　一系

夜泊　我を忘れ我も忘れて揖まくら　都奴雄
仝　なげけ御只雲少老きき秋風ふく　まさの
　　さゝゑくの枝や梅ちるを撰さに　虎丈

名所

こよりの浦や都をくる笠の山乃ゝ　錦丈女
潮水さへ入ぬる海や夕の月　冬典
さゝや花の名ふ嶋し初秋山　升来
仁栄今を盛ゝ鶏ゝいさ丹山　雀蟹

ふるが月やゝ〻雲ふく宮の清　文榮
むさゝ郎や大きゝ高の〻雪所　龍蓼

、

喜宮の生の袖乃ゝ中ゝ北ふ　青芽
武義郎　鵬ふ對さと歌の眷ゝもきき系　寛之
宮居ハ茶の〻ひや冬ゝ生て公望　東水
雲のゝうね宮も時初る暑のふ　東周
ゝまゝふ月やゝ〻我の歌きき　藩山
松浦人　旅人稀ゝ月ゝらん千ものゝ松一陽　まさ

地名 両国橋
東西や橋に二別乃足法縁　何来

雨やみし雨やさらす法界に　香桑

冬この宿もよしやこより雪六ッ花　興周

恵みの法堂や花の陣からし　甫外

地名 真崎
朝寒や大まさて月日乃二見浦　春翊

さくら川花見て又八つの月やおやしや　言外

松もしらしもの鶴乃舞　江又

むさし野八百八町てふその道　世壺

人絶く新わせ世の小川まで　遙瀬

舊跡

姥が池
出けの花の枕やこの何より　昌舟

鞍馬 保土ヶ谷
昔松をふわらし風太刀乃音　春香

梅の里
まさき情しき世も御手に宿　寿綾

雅次郎
からさ川と鶴やそ柱節のふ　素舟

戀

あるしも嫌や河豚の肉房莫告とも　一鳴

う色毋や嫁の腹ふくれ人の苗　北堂

、

泥ふさく蓮よ因う色乃や底嫁　医外

第人小曲輪の里中さびし鳥　松賀

うき人ふ紛て元さまし高月　女　崖京

待つまを無や世とらの秋あきくら　岩規　調布

横ふ宮らくやく鶏鳴奥女中　在泉

やく元又まもおもる嬬乃数を　素外

夏備

細二ろて云まけ落し色蜘蛛　雨廉

うらの波　素外　花ふ無元　素外

夏ろ月ろ十ろく秋ろ夜也けろ　秋葉

追悼　毒ふしい人の毒く

思ろまむ云くろ会ふ秋ろの秋を　金馬

朋友の分ろろろふ

松折くて行まろよ死ものふさくら　白英

[illegible]氏
八十二翁

落ちるや命長きも砂なれば　素外

追い書

[illegible]月九日

蟬聲のやせるも法一万部　社来

懐古

画屏小春やもうし法秋を判　桂峩

[illegible]小[illegible]もうしを男山　素外

遠懐

独りやきのふと生きのこり　素玉

若みやかたらて老のまとかな　子校尼

、

かくまで家を雷ふかせ梅花　素克

見てもこの記事ふも老ぬ[illegible]　之外

森羅万象を見るや老眼の秋乃月　花蘆

人ならハよ我ちの伊達や初の象　鎌倉　英富

我庵にて梭橋八年毎もて紫尓　壷丹
えゆしの素とやいそむ初へ公髪　茂丹

贈谷　牡丹尓折りの用
富好の高くもしやいなの宮人　吳龍
やまとしの初ことせし人のりこも
中へ酒梅さいるる山乃宮へ　仙鳥
白きとりせし人へ
さくらをもちらす恵比の新酒を　得和

ノヒ

来波の年附者所のもと人不の素和を寄ちを
ゝて
郷小杉原志ゝかの繰のこゝろき　素河
返一
古ゝろさしふ素をも助けむ松の素　素丹
行狩氏の今能ゝ下乃陽拙へ下ゝる
伊毛拙哥ゝ八身能恵乃和志きき　素丹
ゝ人一
好の素も歌迦の素陽小陽るのゝ　夷逸

畫賛

莊周　うちなるうん同じ夢てもなくとなる　魚電幸
西王母　こゝろとゝもかゝらしめ恋花の有　如水
松魚　海さき葉魚さいの繋乃多きとし　素德
備後三郎　恋八天も人間ゝ樂書を　素蓬
拾女　さしたる目ゝ目ゝるかゝちや　肌乃香

、

河豚　献立八ゆゝの沢湯ら乃中き恋若　素肥
鬼の会　和ゝ毛月小乃ゝ天恋星ゝ宮ゝ会佛　花九
　　又

仝
遍照落馬

八ゝの月や地獄乃世ゝて人　洞水
口ゝめを多ゝ乃ゝ女郎花　曉柳

趙雲長坂俗の親しい乃策

子を抱小高ゝけてうちこの砧の音　百我
ひぢかの　仙國の相ふ笑め恋彦山　素外

題詠

祇園の桜

よゝ時らめいく秋早ゝ桜の歌　冠春安
月百合　多乃ゝ花地百合ゝ恋ゝ　素琴安

飲中八仙　泥酔を花の中文乃君子達　萬花
湯盤銘　暑ふもさてさし分のらてふもとし又　沂水
高砂　苔と現をいく相生乃松の精　玄蘇

御茶壺　かきくえ川く咲をまつ玄百夜草　舟子
揚貴妃　つてう芦家原泥雪乃ハ北風を　吳郷
光明遍照　人つてう泥十夜乃月玄光明寺　操舟
彭祖　仙人玄うけくゝ菊乃花玄山　玄蘇

魚の名　酒（雑）　酒（老）の名　酒（吉）　鮫（伊左衛門）
農具　好（勘）　乃（義）　苦（鍬）　ハ（孫）　ま（全）　挽（夜の将）

祝

軍書よむ男の玄ふ玄ふ

雄剣の徴や平作の業玄ノ栄　玄蘇
てもてもてて祝もてもて世乃新形繁　蒼海
ぎ玄ぎ玄ぎよ祝の紅彩年中玄ふ　玄蘇

八十八歳

思ひの色を　竹の子の身をなれて安けき風をけと　可恐

青山十四日の朔吹雪とまりけて

初い伸む仏様くさ日乃羽之の紐　史山

袴はかゝやうとさもるまの重所　文廷

婚礼のもも様まいし方へ

雪もとゝや解ける嬉の新麦　春瓜

帯しめ紅や始乃巻をを肩くる函　賀重

父のせわちふ　思ハ山毒を抜くのやる法　義文

つゞく

雪の美尺人へ　登ろふハさとなる山美人　亀山

子代繁んとうけ佛法宿　大美樹

雨風もおさ海ろそいく歌を代乃月　素外

追加

神祇　吉稜ちを白ふ毒ろく法不浄ろを　松十

仝　苔々ても時やしらゆき富士詣　素翁

都を付　俤別乃風やはるまを持あ記　金波

布袋画賛　福和を腸ろを見えて豊乃妹　可矢

附録　上表紙